

アトラスセダーの香り

中村祥二（会長）

はじめに

35 年余の香り研究の中で、灼熱のマラケシュで接したアトラスセダーの香り、それを特徴にした香水フェミニテ・デュ・ボアの誕生、ジャマ・エル・フナ広場とスークのにおいは私の記憶に強く残っている。

1991 年 5 月中旬、パリから飛んで白い家並みの目立つカサブランカを眼下に見た後、そこは対照的な赤茶けた町並みのマラケシュに入った。空港に降り立つとすぐに熱気を感じた。

モロッコのマラケシュを訪れたのは香水フェミニテ・デュ・ボアの新しい香りの特徴となるアトラスセダーの香りをしっかり把握し香りの創作に活かすためだった。

マラケシュという土地

マラケシュは乾燥地帯で、年間を通して降水量は少なく雨季には少量の雨が降る。昼と夜の気温差が激しいステップ気候である。モロッコ中央部、アトラス山脈山麓の丘陵地帯にあり、城壁に囲まれた旧市街（メディナ）と旧市街の西に広がる新市街からなっている。1985 年に世界遺産に登録された旧市街は北アフリカでも最大の規模である。城壁に囲まれた旧市街の中心にある約 400 メートル四方のジャマ・エル・フナ広場は、文化と交易の中心として栄えてきた。特にこの広場の空間は世界無形文化遺産への登録が事実上決まっていたが 2009 年 9 月正式に登録された。

訪れてみると、物売りや大道芸人、蛇遣いでにぎわう。物語の語り手の周りにもたくさんの人が集まる。私にはその物語が分からないのがなんとも残念だった。蛇遣いにも人気がある。コブラに似た蛇 2 匹は笛の音に踊らされて首をもたげていた。蛇遣いも蛇にかまれることがあるというから危険な商売だ。乳飲み子を抱いた女の物乞いがいくら追い払っても纏わり付いてくる。それが、わずかな小銭を与

えると、すぐに離れていった。もっと早くあげればよかったものをと、胸が痛んだ。それから、魚屋に寄ってみると、日本の魚屋のように、たくさんの魚は置いていない。大きな魚数匹をまな板のようなものに載せてさばいていた。暑いため人から見えるようなところには、並べてはおけないのだろう。私のお目当ては魚屋でどんなにおいがするだろうかということだ。私が予想していたのとは違って、生臭い魚臭さや腐った臭いは全く感じられなかった。暑く乾燥した空気の中ではこのようなにおいも感じにくいのだろう。

この広場の北側に世界最大の市場といわれるスークがある。曲がりくねった細い迷路のような路地の両側に店がたくさん建ち並んでいる。不慣れな私達だけでは迷ってしまうし、怖い感じがするが、ガードマンを兼ねた案内人を 1 人つけてくれたのが幸いであった。そこでは、色合いの美しいマフラーやベッドカバーの布、革製の履物、ティーポット、ローズウォーター用のポット、真ちゅうの飾り皿、山盛りのミントの葉、オリーブの実などを扱う店がひしめいている。

裕福な商家の自宅に招かれた折、家の中は、外の暑さとは対照的にひんやりとした空気が広がっていた。壁の厚さが 15 センチほどあるのは、暑いステップ気候の中での伝統的な工法なのだと分かった。ポットの中に大量のペパーミントの葉を茎ごと詰め込んで入れた甘さの強い紅茶は喝いた喉にはとてもおいしかった。マラケシュでこの紅茶はその後たびたび経験することになった。

メディナの城壁を離れて 30 分ほど歩くと、12 世紀に作られた広大なメナラ庭園に着く。中央には美しい池が 30 キロ離れたアトラス山脈から引いた豊かな水をたたえ、規則正しく植えられた広大なオリーブの林がその周りを囲む。緑と水の少ないこの国で、この庭園はオアシスとして愛されてきた。オリーブの木の下で家族連れがたくさんの人々が暑さを避けて憩っているのが印象的だった。

ラ・マムーニアに宿泊

ラ・マムーニアは90年以上の歴史を持つ、モロッコを代表するホテルである。外国の元首も泊まるというこのホテルは、短剣を下げた体格のよいガードマンが玄関の両側に立っている。この間を抜けてロビーに入ると、バラの香りが漂っている。こゝのある甘さが感じられて快い。それがどこから来るのか分からなかった。人工的な香りではなく、自然なイメージである。翌日、その香りを探して入り組んだ広いロビーを香りの強さをさぐりながら、あちこち歩き回ったところ、イスラム特有の細かな文様の、胸ほどの高さの大きな壺にぶつかった。のぞいて見ると、開き始めたピンクのバラの蕾が詰まっていた。モロッコのアトラス山脈の南にあるダデスの谷間で栽培されているダマスク系の香料バラの蕾だ。香りの源はここだったのだ。

水の貴重なマラケシュでもホテルの庭園の大きなプールには水が一杯に張られていて、宿泊客の女性連れが数組泳いでいるのが見られた。もともとモロッコ王家のものだった5ヘクタールの広い庭園には、オリーブやバラ園がひろがり、朝の散歩は気持ちよかった。

アトラスセダーの香り

アトラスセダーの香りを是非モロッコまで嗅ぎに来ないかとセルジュ・ルタンス氏に誘われた。パリで売り出す新しい香水の、これまでにない特徴として使いたいと言うのだ。彼はパリを本拠地に、写真家、メーキャップアーティスト、デザイナー、コピーライターと幅広い分野で活躍しているスーパーアーティストでありクリエイターである。モロッコは遠いし、日本にその材を送ってもらって皆で嗅ぐようにしたいと提案したが、ルタンスの返事は「アトラスセダーの香りは、モロッコの灼熱の地で嗅がなければその本質はわからない」という頑固で強い調子のものであった。彼は一事が万事凝り性で、この気質もアーティストとしての成功を支えてきている。アトラスセダーの切り出した材をその地で嗅ぐために、どうしても来いというのである。

アトラスセダーはモロッコのアトラス山脈に生育する松の一種で、レバノンセダーと近縁のものである。レバノンセダーには“レバノンの香柏は神の

香り”という言葉が残っている。BC8世紀のアッシリア王サルゴン二世は、王宮の建立にこの木を使ったし、この木材はその後、息子のセンナケリブ王も用い、王宮内の扉を開け閉めする度に心地よい香気が漂い、王宮は香気を放っていた。かってエジプトやメソポタミヤの列強は、神殿や宮殿や船などを造るために、この木材の資源を求めて争った。レバノンセダーに関しては聖書にも詳しい。BC15世紀頃、神殿や宮殿で古代の聖職者や王侯貴族達は、この香りに包まれていたのだろう『森を食べつくした国』安田喜憲。現在のレバノンの地は一木一草もなく、風に砂塵の舞う荒地という。人類の最初の森林破壊の恐ろしい例でもある。

レバノンセダーに近縁のアトラスセダーはどんな香りがするのだろうか、またそれはどんな木なのか、私もとても知りたくなった。

マラケシュでのミーティングの後、自分が愛する香りとイメージを私達パフューマーと共有するために、ルタンスはアトラスセダーの木材を私達の泊まっているラ・マムーニアに届けてくれた。ホテルの部屋に落ち着くとまもなく、大きな木材と同時に段ボールに入ったカンナクズとオガクズが運び込まれた。木材はあまりにも大きくてホテルのドアから入らなかったで、仕方なく横につり下げて窓から部屋の中に入れた。私が幼い頃に近所の材木屋で、色々な長さや巾や厚さに製材した材木を高く並べて立て掛けてあるのをよく見掛けたものだが、運ばれてきたものは、中位の大きさのかなりボリュームのあるものだった。

アトラスセダーの森や、木を伐採するところを見ればフェスまで行けばいいよ、と言われた。そこで地図で調べるとマラケシュから500キロある。車では往復に時間もかかるし途中悪路もあるかもしれない。残念ながらお断りすることにした。

材の色は褐色を帯びていて、湿った感じがした。すぐに嗅いでみた香りは、和菓子の杉の木箱の香りに、蜜臘の甘さとバナナを思わせるような果物と皮革様の弱い香りが混じっていて、シベット様のセクシーさが底のほうにほのかに感じられた。

その夜は、巨大なセダーを抱くようにして休み、彼が使いたい香りのイメージを膨らませた。こうして、アトラスセダーの香りを新奇な特徴にした、たぐいまれなフレグランスが生まれることになった。



右：香水フェミニテ・デュ・ボアの最初のボトル 1992年

左：ローズ・デュ・ニュイなどのフレグランスの釣鐘型ボトル 1992年

なお、1999年から角型のボトルにデザインを一新している。

香水フェミニテ・デュ・ボアの インスピレーション

いくつもの香りを創造することは、違う世界を旅することだ、というルタンスは、この地からインスピレーションを受けた多くのフレグランスを創造することになる。

モロッコへの最初の旅の途中、彼はマラケシュで木工職人からアトラスセダーの木片を譲り受け、清冽な香りに魅せられる。その衝撃は、後にこの香りの香水を創るのが自分の使命だと思ったと語るほどであった。それまで、木の香りをテーマにした香水はほとんど市場に無かったので、周囲は驚き、反対したが、彼は1980年から共に仕事を始めた資生堂で夢を実現させた。

1992年、資生堂から発売された「フェミニテ・デュ・ボア (Feminite du bois=木の女らしさ)」は初めての女性用ウッディ・タイプの香水となった。クリエイティブなコンセプトとそれを表す香りの新規な特徴、香りの美しさと調和、香りの広がりすべてを備えていた。モロッコのアトラスセダーのフルーティでクリーミーな特徴をもったエキゾチックで官能的なこの香りはフレグランス市場でも特異な存在となり、パリのシャンゼリゼですれ違う人を振り向かせるようになったのである。そしてフランスで最も有名なフレグランスの賞 Fifi Award のオリジナルコンセプト部門賞の受賞という栄冠を獲得した。

更にルタンスは、自分の香水を紹介するための特別なサロンをパリにつくることを思い付き、商品やディスプレイ、インテリアの詳細に至るまでの提案をした。彼自身が選んだのは、歴史と文化に彩られたパレロワイヤルだった。そこは、ルーブル美術館北側でフランス銀行があり、一角に三つ星（現在は二つ星）レストランでナポレオンから文豪ユゴー、サルトルなどを迎えてきたグラン・ヴェフルのある洗練された地区である。後にレ・サロン・ドゥ・パレ・ロワイヤル・シセイドー（後にレ・サロン・ドゥ・パレ・ロワイヤル・セルジュ・ルタンスに改名）とよばれることになる。

外観、室内装飾などルタンスの豊富な経験と美意識の全てが注がれた。そして彼はおとぎ話の世界にあるお城のようなこのブティック専用の香りを毎年1、2種類発表してきた。それらの香りは今では約35カ国・2000店で展開するようになつた。

参考資料：

『万物資生』 vol.12、2005、(株)資生堂
AEAJ 会報誌 no.54、2009、日本アロマ環境協会

国際香りと文化の会